

小川教授との交遊抄

阿 部 茂 行

出会い

小川直宏教授との出会いは1970年6月に遡る。学部を卒業し大学院に2ヶ月在籍しただけで、米国ハワイ州のイーストウェストセンター（EWC）の奨学金を獲得し、私がハワイ大学に留学したのが1970年6月である。アメリカ政府奨学金といえばその当時はフルブライトかEWCであった。EWCのプログラムは研究者向けというよりは、MAをとっているような分野で活躍することが期待されていたようで、ハワイ大学だけでなくField Study といって他の大学・研究機関に留学することも可能であり、実に刺激的なものであった。授業料を含むフルスカラシップが与えられ、アジア各国からおおむね10名、合計で100名ほどが毎年奨学生となり、同じ寮で2年間同じ釜の飯を食うことになる。ホストファミリーも世話してもらえ、そのホストファミリー Wood 家に最初の週末に招かれたときに、一年先輩の小川教授と初めて会ったのである。色が黒く流暢な英語を喋る彼はどう見てもローカルなハワイの人にしか見えなかった。ご主人の Wood さんは米軍の将校で律儀で敬虔なクリスチャン。その後、月一以上の頻度で家に招いてくれ、時にはバザーなどの催し物に招待してくれ、アメリカンライフを直に垣間見ることができた。食事の時には必ず神にお祈りをして感謝する、そういうライフスタイルを学んだが、その時にもいつもそばに居てくれたのが小川教授であった。

このように私にとって小川教授との出会いは、Wood 家の“長男”“次男”としての関係から始まったが、その後、人生の様々な局面でお世話になることになったのである。そうした局面のいくつかをこの雑文で紹介していきたい。

学生時代

EWCのプログラムは当時過渡期にあった。私は本土の大学などにField Studyに出してくれるオーブングラントというプログラムを選択したが、小川教授ははなから研究所に所属するプログラムに参加した。それもその後の進路を決める人口研究所であった。当時全米を代表する Paul Demeny という人口学者が研究所長で全米から優秀な研究者を集めているところであった。今から考えると若いのに自分のやることを決め邁進するそんな彼には、先見の明があったとしか思えない。まもなく分かることであるが、研究所に所属する者は2年の奨学金という期限が撤廃されたのである。国際貿易について研究していきたいと思っていた私には、ぴったりの研究所がなかったこともあり、経済学部のTAとしてその後博士課程に進学した。TAの仕事に時間をとられるこの身と、ふんだんに研究時間のある彼との差は歴然としていた。

思い起こすといろんなことが学生時代にあった。二人の共通のある日本人の友人がパキスタンの女性と結婚した。イスラムに改宗し東北の大学で教え、のちエジプトやいろいろな国で日本語を教え、マレーシアを終の棲家としている友人だが、彼らのベストマンを二人でつとめ、判事の前で彼らの結婚の証明をする役をこなしたりした。

小川教授のネットワークはすぐに自分のネットワークとなった。当時の人口研究所の秘書の方とはいまだに親しくしてもらっている。広島出身の日本人で面倒見のよかった兄貴分のような数学者にも紹介してもらい、週末に彼の家でバーベキューで腹を満たし、将棋で知恵を絞ることも多かった。日大人口研究所(NUPRI)の初代所長の黒田俊夫先生とも彼のおかげで楽しい思い出がいくつもある。私自身はまだ学部生の延長でありネットワークがなかったのに比べ、彼はすでに大人でそのネットワークは広く深く、いつも驚かされていた。

博士論文についても、着々と彼は進めていき、仕上げに日本のマクロモデルと自分の人口モデルをドッキングしたい。その調査のために私の母校である大阪大学を訪れたい、先生を紹介して欲しいと言ってきた。恩師の新開陽一先生に説明し、会っていただくことにした。ハワイに戻ってきて、小川教授は阪大ってすごい、きら星のように有名な先生の研究室があって身震いがしたとコメントしてくれたことを今でもよく思い出す。

ESCAP 時代

卒業してすぐに小川教授は国際連合 ESCAP の人口部に就職された。その一年後、私も ESCAP の発展計画部で職を得た。またまた金魚の糞のごとく後追いである。昼食をしょっちゅう一緒にとったりして、情報交換をし、国連若手研究者の連携は非常によく、意義深い研究生活を送ることができた。国連独特の空気にも触れることができたし、大使館とのつきあい方も覚えた。とにかくこの時代は日本からの来客も多く、ネットワークがものすごく広がった時代である。

この時代に研究以外で思い起こすことと言えば、何をすることもストイックな彼のジョギングのエピソードだ。犬に追いかけられるといったことはなんどもあったらしいが、あるとき、「この間はタイ人の若者に追いかけられた」と随分と高揚して語った。「君はきっと凄いボクサーに違いない、挑戦したい」とボクシングの構えをされ、ここはやはりタイだとカルチャーショックを受けたと半分自慢げに喋っていたのが懐かしい。

ソーシャルな面でもよく一緒に時間を過ごした。国際機関の専門家集団で Angels というソフトボールチームを作り、地元のソフトボール・リーグで、毎週のように試合をした。日系企業が主な試合相手であった。練習も良くした。私はピッチャーを務めたが、足の速い小川教授は外野を守った。その練習の時、彼のストイックさには参ったものだ。普通の人間なら守るかノックを打つかのオプションがあればノックを選択する。彼は守りをいつも選択し、際限なく右に左に走りボールをキャッチしてはバックホームする。決して自分からもうこの辺で止めようとは言わない。いつも私がノッカーで手に豆を作り、こちらが降参するはめになった。このストイックな練習の賜物か、このチームは結構強く、国立競技場での優勝決定戦では米国海兵隊チームと対戦した。惨憺たる結果ではあったが、いい思い出のひとつである。

1980年代と1990年代

3年ほど国連に勤めたあと小川教授は日本大学に、そして私は一年遅れて京都産業大学に就職し、大学教員としてのキャリアをスタートさせた。1984年になって小川教授から「ASEANにおける国内人口移動と開発」というNIRAの委託研究に誘われた。最初のプランでは国連での仲間である原洋之介氏が農業を担当し、私が工業を、そしてその2つの産業間の労働移動を小川教授が担当し分析を深めるということであった。どういう訳か原氏が抜け、農業の部分のほとんどを小川教授がやってくれて、そのタフさと仕事の速さには舌を巻いたものだ。このプロジェクト関連の国際会議を開催するということになり、それを成功裡に行うために、主だった参加者に事前に会って会議の趣旨を伝えるように小川教授から頼まれた。タイやフィリピンに出張し数人の参加者と直談判したが、なるほど、国際会議はこうすべきなんだということ学んだ。後で多くの国際会議を主催することになるが、この経験が生きることになる。

その後、PECCのプロジェクトなどでハワイに客員で行くことも数度あり、そのたびに小川教授もEWC人口研究所に訪れていたりして、旧交をあたためた。年に4回ほどリプリントシリーズやワーキングペーパーを受領したが、よくこれだけ論文を書くなどと思うほどの著作の数に圧倒されはじめたのもこの頃からだ。

1990年代には私は神戸大学に移籍した。NIRAの委託研究のような共同研究はなかったが、この頃で特筆すべきはハワイ大学とストックホルム大学が日本経済についてのプロジェクト・会議をスタートさせ、それに一緒に参加したことだろう。成果は*Japan's New Economy: Continuity and Change in the Twenty First Century* (Blomstrom等編, Oxford University Press, 2001)として出版された。会議が開催された時に北欧で会ったがすごく久しぶりの気がしたので、この時代あまり会っていなかったのかも知れない。

2000年代以降から現在まで

2000年代になると私は*Asian Economic Journal*の編集に忙殺され始めた。この頃は私の方から小川教授に助けを求めてばかりいた。AEJへの投稿論文で人口関係のもの多くは彼のアドバイスをもらった。そんな中、ハワイ大学のAndrew MasonやSumner La Croixから提案があり、丁度これもまた私が編集長を務めていた*Southeast Asian Studies*に特集号を発刊した。“Population and Globalization,” *Special Issue*, No.40, Vol.3, 2002がそれだ。

阪神淡路大震災の後、神戸に多くの研究機関とともにアジア太平洋フォーラム・淡路会議が2000年8月に発足し、私は発足以来、現在まで研究委員を続けている。2006年のこの会議のテーマは「アジアに迫る少子・高齢化」であったので、キーノートスピーカーとしてAndrew Mason, Robert Retherford, と小川の3教授に淡路島まで来てもらった。Mason教授の人口ボーナスの話は大いに受けた。小川教授のプレゼンテーションはどうしたらあんなに面白いパワーポイントが作れるのか、非常にアーティスティックであり、かつ情報が豊富、それに早口のプレゼンはいつも腹をかかえて笑うほどのジョークを交え、聞いていて楽しい。この淡路会議の発起人の一人、貝原前兵庫県知事はこの3人の講演にいたく感心し、のちに私に兵庫県の職員に向けて「アジアに迫る少子高齢化」について講演する

ように私に依頼があった。そしてその講演の内容はそのまま『21世紀ひょうご』に掲載された。

思い起こすと1970年6月に初めて会ってからもう45年近くになる。その間、私が東京に出張の時にはNUPRIに立ち寄ることにしていて、いつも一緒に昼食をとるのが恒例になっている。我々の共通の友人、タイ開発研究所(TDRI)のSrawooth PaitoonpongはMasonやRetherfordとともに、NUPRIのレギュラーなビジターだ。彼は小川教授が国連を去ったとき、その後国連に就職したこともあり、私以上に少なくとも研究面では緊密に連絡をとってきた。いろんなエピソードを知っていると思い、聞いてみると、次の様なことを書いてきてくれた。

“Anyone who knows Hiro will agree that he is smart, competent and very energetic, even workaholic. But, to me, Hiro is much more than that. He is a friend, a very good one. (中略) Hiro never leaves me alone, in the good sense of the world. He has provided support and help to me on many occasions, and this includes his constant invitations to me to do collaborative research at NUPRI. He is a family man. While working hard, he is taking good care of his family - his wife Gail and his son Tad. (中略) He has a very good sense of humor. He always makes people laugh during his lectures and presentations. Also, when he is relaxing, you can hear funny stories from him.”

これから

長い付き合いになる元EWC Population Instituteの秘書は、“Economists never retire”と言う。周りを見ての発言だが、小川教授も形はこのたび定年だが、死ぬまで現役、研究は続けられるものと思う。最近のNational Transfer Accountsの研究は、一度バンコクで会議を一緒させて貰ったが、素晴らしい方向性を持っている。昨年12月には、ストックホルムで行われたノーベル賞授賞式の関連公式イベントであるNobel Week Dialogueに、キーノートスピーカーとして招待され、NTAを用いた分析結果を報告し、国際的に高く評価されている。このNobel Week Dialogueは過去のノーベル賞受賞者をはじめ、世界のトップレベルの学者などが招かれるシンポジウムで、その様子はインターネットでライブ放映されるといった一大イベントだ。これからも次々と新機軸を打ち出し、常に後進の研究者に刺激を与え続けていただきたい。ひとまずは日本大学を定年になられるわけで、これは素直にお祝い申し上げたい。いつも金魚の糞のようにつきまどってきた私としては、定年後の研究生活をどのように送られるか、注視して、嫌がられるかも知れないが、追っかけをまだまだやっていきたいと思っている。